

う じ ま やま
「宇 治 間 山」

1) み吉野の 山のあらしの 寒けくに

はたや今夜も 我がひとり寝む

卷一―七十四

右の一首は、或いは「天皇の御製歌^{ぎのよせうた}」といふ。

（解説）吉野の山おろしの風がこんなに寒いのにああどうやら今夜も私は独り寝をすることになるのか。と侘しさを嘆いた歌であろう。

①なお、「はたや今夜」の「はた」とは、あるいは、ひよつとしての意である。

②注書きの右の一首は、或いは「天皇の御製歌」とは「作者は不明歌だが文武（第四十二代天皇）御製の伝えがある。」との意。

2) 宇治間山 朝風寒し 旅にして

ころもか
衣貸すべき 妹^{いも}もあらなくに

(解説) 宇治間山の朝風が寒い。旅先にあつて、私に衣を貸してくれる妻もいないのに。

①この歌の題詞は「大行天皇、吉野の宮に幸す時の歌」とありさきのすめらみこと文武天皇が大宝元年(701)二月に吉野離宮へ行幸した時、いづま随行した長屋王の作で、この前の天皇の御製歌に唱和した歌であらうといわれている。長屋王は天武天皇(第四十代)の孫。

②この歌の題詞にある「天皇が行幸した吉野の宮」は奈良県の中部に位置する吉野郡の北部にある吉野町の中央部を東から西に流れる吉野川の上流部右岸にある吉野町宮滝で発掘調査の結果、飛鳥、奈良時代に歴代天皇が度々行幸した離宮「吉野宮」「吉野離宮」跡と考えられる遺跡が発掘され国の史跡「宮滝遺跡」として保存されている。

③古代において都のあつた飛鳥と、離宮のあつた吉野を結ぶ重要な道として、現在の奈良県高市郡明日香村と吉野郡吉野町との町村境付近にある峠、「芋峠」を越え吉野町千股ちまたの集落を通る古道(現・奈良県道十五号線)が最短である道として開かれたようである。

④この歌に詠われている「宇治間山」はその名は現存しないが、明日香村から芋峠を越えた吉野町千股の地の山と言われることから、文武天皇の吉野行幸時この道を通ったと考えられる。

⑤宇治間山という名は三重県宇治山田と京都府宇治の中間に位置

するからということからつけられたと地元では伝えられてきたとの説がある

(参考文献)・新潮日本古典集成 ・山崎しげ子編「奈良大和路の万葉歌碑」

吉野町ホームページ等

(写生地)

飛鳥から芋峠の険を越えた吉野町千股の里から、はるかに吉野の山並みをひかえて、宇治間山の美しい山容を描く。(池田杏花)

